# 特別講演『「おめでとう」で始まり「ありがとう」で終わる人生を―福祉とキリスト教―』

ルーテル学院大学 学事顧問・教授　市　川　一　宏
〔報告者〕東京神学大学大学院２年　飯島　喜世恵

第47回教職セミナーが1月12日～14日にかけて国立オリンピック記念青少年総合センターを会場に行われました。二日目の午後7時から、市川一宏先生（ルーテル学院大学前学長、現在同大学学事顧問・教授）をお招きし、『「おめでとう」で始まり、「ありがとう」で終わる人生を―福祉とキリスト教』と題した特別講演をしていただきました。先生のご専門は社会福祉制度政策・地域福祉・高齢者福祉です。先生の学内外の活動は、日本の社会福祉の中核を支え、推進する力となっています。そして、そのお働きの原点は、神の愛にあります。

はじめに市川先生は、出席している教職・教員・卒業年度の大学院学生に向けて、ご自分が日本基督教団阿佐ヶ谷教会で、故大村勇牧師より洗礼を授けられた信仰者であり、ご夫人も故大村先生より洗礼を受けられたこと、ご両親は大宮溥先生に洗礼を、またお二人の息子さんは幼児洗礼を授けられたことをお話しになりました。次に社会福祉の専門者として、テーマのもとに今日の多様な生活問題とその取り組み、そして教会についてのご自身の思いを語られました。

配布された「『左近淑』日本の説教Ⅱ　第14巻解題」（『説教黙想アレテリア72』教団出版所収）には、故左近先生の問いかけに応答されている市川先生の率直な言葉が綴られていました。故左近先生がたびたび言われた「低きに下る神」、すなわち「誰ひとりそこからはい上がれない奈落の渦に、まことに〈むごい〉世界に〈地の底〉に下りられるから、至福の神なのであります」との言葉を市川先生は生きていく礎に置かれました。市川先生は福祉に向かう姿勢を「真向かう」と表現し、たびたび口にされました。「低きにくだる神」に「真向かう」一人の信仰者の生き方が重なっていました。以下は先生が語られた講演の要旨です。

今日の多様な問題が孤立と密接に関わっていることは明らかです。様々な絆が断ち切られ、叫びや悲鳴が聞こえており、目に見える光では覆い隠すことはできません。今後、事態はさらに深刻になることが予想されます。児童虐待は増え、相談対応件数の24・7％が3歳から学齢前の子どもたちです。高齢者虐待を含め、弱い状態にある人々が傷つけられていることに恐れを抱いています。小・中学生のいじめや自殺の連鎖の問題も深刻です。児童養護施設の子どもたちは職員の愛情を求め、迎えに来る家族を待ち続けています。また、インターネット上の世界にある仮想の自分へ逃避し、実際の社会で「生きること」をやめてしまう青少年が増えています。さらに高齢者では孤立死（特に男性単身者）、介護者の孤立（介護地獄は身近で発生）、消費者被害の問題や、団塊の世代が後期高齢者となり、一人暮らし、老老介護、認知症の方が認知症の家族を看る認認介護の増加が予想される２０２５年問題、災害時の要援護者、経済的困窮の問題等がはっきりと現れてきています。いずれの世代も生きていくことが難しい社会です。

しかし、命は神さまから祝福されて与えられたものです。その命が現在の社会であまりにも軽く扱われています。神から祝福された命であるという原点を私たちは見失ってはなりません。命を与えられて「おめでとう」と言われる。そして自分の死を迎える時、お世話になった周りの人に「ありがとう」と言える人生を一人でも多くの人に送って頂きたい。また一人でも多くの命を救いたい。そのために私は言葉ではなく、共に寄り添う生き方を通して神を証ししたいと願っています。私の福祉の原点はキリスト者であることです。

今、家の扉が堅く閉められ、塀で囲まれています。学校や職場と、家の間にほっとできる居場所がありません。家庭や地域が壊れています。だからこそ、その事実を認識し、生活する場、すなわちコミュニティを再生する取り組みが始められています。２０１５年12月東京都共助社会づくりを進めるための検討会は、T：多様性を尊重し、違いを認めあい、O：思いやりの気持ちをもって、K：協力しあい、Y：夢を描く、O：お互い様の社会づくり、すなわちＴＯＫＹＯの未来を提案しました。

教会には、困難に直面する人々と共に歩もうとする働き人を支えていただきたい。また、困難に直面する人々に寄り添って頂きたい。その方法は、0か１００ではありません。その間に、1から99の方法があります。

また、高齢者が多いことは教会の誇りです。安心できる場だからです。喪失の時代と言われる高齢期に、希望をもって今を生きる兄弟姉妹がいます。誰にも将来を見通すことはできません。過去の後悔に押しつぶされそうになります。しかし、神の愛のまなざしを心にとめ、日々祈りつつ今を生きることによって、過去の事実は変わらなくとも、過去の意味が変わっていく感動を、神はたえず私たちに与えてくださいます。だから見通せない将来に向かって、日々、歩んでいく（拙稿『「おめでとう」で始まり「ありがとう」で終わる人生　福祉とキリスト教』教文館、２０１４年）その拠り所になる場が、教会だと思っています。

命と真向かう時、神の言葉を味わうことができます。ヘンリ・ナウエンは、人間がもつ弱さを「創造的な弱さ」と言いました。本来コミュニティとは、住民同士が出会い、それぞれが抱く痛みを学び、互いを認め合い、共生していくための合意を築く場であるはずです。人間のもつ弱さにより、共感し、関わりによって目覚め、自分らしさや持ち味を会得していく。この人間理解を、命を輝かせる「光」としたい。孤独ではない。神が共にいてくださる。神から愛されている人生の喜びと平安を、証し人としての生き方を通してこれからも伝えたいと願っています。